

アリナ・デ・シルバ

—古き良き時代のパリでタンゴを歌う—

(Tanguendo en Japon No. 20 (2007) 掲載原稿の訂正版)

齋藤 富士郎

今日ではアリナ・デ・シルバが歌うタンゴを好んで愛聴する人はかなりのタンゴ・マニアの部類に属するであろう。第2次大戦前はタンゴのレコードやタンゴに関する情報が我国に届くのはアルゼンチンから直接ではなく、欧州を経由することが一般的であったと思われるが、その時代でも彼女の名前は我国でそれ程注意されたわけでもなかった。しかし我国のタンゴ愛好家の大先達である高橋忠雄氏はすでにその当時からレコードを通じて彼女の存在を知っておられたそうである[1]。

高橋氏は今から70年も前に欧州と南米を歴訪するという快挙を成し遂げられたが、その際にパリで実際にアリナ・デ・シルバの歌声に接し、その様子を滞欧先から「ダンスと音楽」誌に寄稿された。それが参考資料[1]である。

パリのモンパルナスで一番良いキャバレー「ポアソン・ドール (Poisson d'Or) (金魚?)」にアリナ・デ・シルバが出演することを知った高橋氏はベルリン行きの荷造りの忙しい中を無理して彼女の歌を聴くことにした。それは昭和12年(1937年)6月19日、時刻は夜中の3時ごろであった。だから厳密に言えば6月20日になる。店に到着した彼女はすぐには歌い始めず、偶然にも高橋氏の隣のテーブルに席を取り、シャンパンを抜かせ、中々豪勢な食事を始めたそうである。服装は地味であったが手と胸にはダイヤと真珠が輝いていたという。高橋氏は同行のフランス人を介して彼女といろいろ話すことができ、写真にサインをしてもらうことも出来た。このサイン入り写真はここに示すように「ダンスと音楽」誌の昭和12年9月号の表紙を飾った。写真に書かれた文字は「ダンスと音楽」誌に、万感を込めて、アリナ・デ・シルバ」と判読できる。彼女の出演が来ると、先ずルンバの「ネグラ・コンセンティエーダ」で大喝采を受け、次いでメキシコの民謡と「アマポーラ」が続いた。それで終りのはずであったらしいがお客は承知せず「ドンデ・エスタス・コラソン」と怒鳴りたて、結局それも歌った。



彼女はマイクロフォンも使用せず、それでもその歌声はかなり広い店内に響き渡り、店内は大いに盛り上がったという。彼女が帰るときに高橋氏も一緒に外に出たが、驚いたことにそこには運転手付きの自家用車が待っていた。このことから高橋氏はアリナ・デ・シルバについて余程の金持ちという印象を持たれたようだ。(以上、参考資料[1]による。)

余談ながら高橋氏はこの後7月16日にハンブルグを出航し、8月10日にブエノス・アイレスに上陸されている。26日程の船旅であり、隔世の感がする。

この話から推測されるようにアリナ・デ・シルバは生活のために歌っていたのではないようだが、それでも彼女の名前は当時のパリの歓楽街ではかなり有名であったらしい。フ

アン・マヌエル・ボネという人は当時のパリで芸術家や詩人が出沒したピガール、サン・ジェルマン・デ・プレ、モンパルナスのキャバレーではアリナ・デ・シルバが歌っていたとわざわざ述べている[2]。

アリナ・デ・シルバの出自について今までは全くといってよいほど不明であった。しかし試しにグーグル検索エンジンでいろいろと検索した結果、いくつかのペルーのサイトが彼女に関連するいろいろな情報を発信していることがわかった。但し残念ながらタンゴに関する情報は全く無い。それらによると、私が以前にアラン・ブーランジェやパット・ロブソン・ブルース・バスティンの記述[3][4][5]に基づいて、「ペルーのパリ駐在領事の夫人であったが、夫が本国のクーデターで失職し、マヌエル・ピサロの勧めでタンゴを歌い始めた。彼女の夫の名はアルフォンソである。」[6]と書いたことが、二人の男性を一人の男性にしてしまった大間違いであることが明らかになった。それで前稿の訂正も兼ねて改めて彼女についてわかったことを紹介する。

彼女のペルーのカジャオで生まれたとある[10]が、生年は不詳である。結婚前の姓名はアリナ・レストナ(Alina Lestonnat) (Lestonnat の正しい発音は不明である。ここでは仮に「レストナ」としておく) と言った。Lestonnat という姓はフランスではよくあるらしく、また彼女のことをフランス系と述べている資料[11]もあるから、レストナ家はフランス系ペルー人の家系ではないだろうか。またアリナは結婚後も夫の姓と共にレストナという実家の姓も併せて表記されることが多いからレストナ家はかなりの名門ではなかったかと想像される。

これとは別にパテ社の 1929 年 7 月のカタログには、アリナ・デ・シルバはフランス人の父親とアルゼンチン人の母親との間にブエノス・アイレスで生まれたという記述があることをブーランジェは紹介している[4]。参考資料[10]の記述とは食い違いますが、全くの作り話とも思えず、何らか根拠があつてのことだろう。

彼女は 2 回結婚しており、最初の夫はパブロ・アブリル・デ・ビベーロ(Pablo Abril De Vivero) (1895-1987) といい、ペルーのキャリア外交官であるとともに作家でもあった[7][15]。二人の間には息子のフランシスコ・アブリル・デ・ビベーロ(Francisco Abril De Vivero)が 1919 年 10 月にペルーのカジャオで生まれている[15]。このことから二人の結婚は 1918 年頃と推測され、また 1919 年当時はパブローアリナ夫妻はまだペルーにいたわけで、パリに出てきたのはその後のことと考えられる。ペルーでは 1919 年にアウグスト・レギーアによるクーデターが起きているから、何かその事と関係があるのかも知れない。アリナのことを「幼な妻」と述べている資料[9]もあることから類推すると彼女の生年は 1900 年前後ではないだろうか。このままで行けば名門外交官夫人で一生を終えたのかもしれないが、ここにアルフォンソ・デ・シルバという作曲家兼ピアニストが彼女の前に現れる。

アルフォンソ・デ・シルバ(Alfonso de Silva)は 1903 年にアリナと同じくペルーのカジャオで生まれた。長じて音楽を学び、18 歳の時に国の奨学金を得てマドリッドの市立音楽院に入学し、そこで 3 年間学んだ後にパリやベルリンを歴訪して帰国した[10][12]。1925 年に 2 回目の渡欧をし、パリ在住ペルー人の詩人や作家と交流を深めたが、この時にアリナで出会って大恋愛(資料[11]には”gran amor”とある)の末にアリナはパブロ・アブリル・デ・ビベーロの許を去り、子供のフランシスコを伴ってアルフォンソ・デ・シルバと結婚し、アリナ・デ・シルバとなる。だから正式にはアリナ・デ・シルバとはアルフォンソとの結婚後の名前である。資料[17]はフランシスコをアルフォンソ・デ・シルバの継子であると述べているから、法律的にもそういう関係になったのだろう。更にアリナは 1926 年に

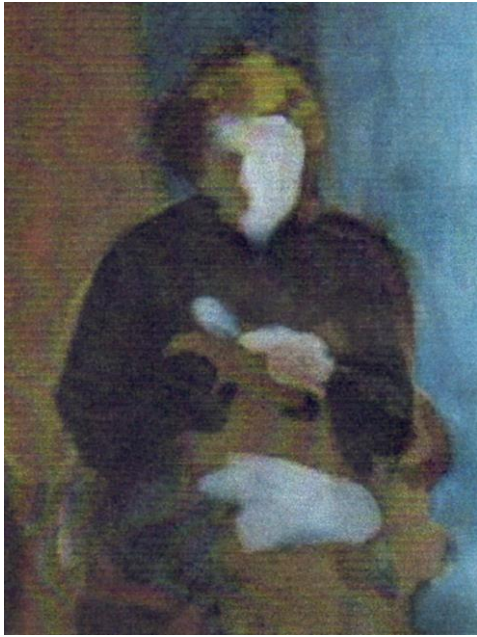
アルフォンソとの間に一人息子のアルフォンソ（アルフォンシート）を高級リゾートとして有名なビアリッツで産んでいる。アリナはよほど裕福な暮らしをしていたらしい。

アルフォンソ・デ・シルバはペルーでは音楽家としてかなり著名であったらしく、2003年の1月には彼の追悼行事が催されている[11][13]。また彼は妻のアリナに”Tus ojitos（ディスコグラフィでは”Tus ojos”となっている）”という曲を献呈している[10]（参考資料[10]にはワルツと記載されているが、実際に聴いてみるとタンゴである）。アリナが歌う”Caminito”(3706 (Pathe))、”No te engañes corazon” (RS 1226 (Regal))、”Mama, yo quiero un novio” (X 3825 (Pathe))、”Donde estas corazon” (X 3825 (Pathe)) でピアノ伴奏を努めているのは間違いなく夫のアルフォンソ・デ・シルバであろう。しかしどうしたわけかアルフォンソはその後リマに戻り、1937年5月7日に若くして亡くなってしまった。高橋氏がアリナに会われたのはその1ヵ月半ほど後のことになる。ここで解せないのは、夫が故国で亡くなって未だ1ヶ月半というのにアリナはパリで豪華な生活をしながらキャバレーで歌っていることで、どうしてそんな生活が出来たのだろうか不思議である。アルフォンソはそれ程裕福であったとも思えず、また結構ボヘミアン的であったというから、とても運転手付き家用車を持ち回すという生活は無理なはずである。アリナの実家のレストナ家が資産家で、そこからの援助で生活していたのだろうか？

1939年に第2次世界大戦が始まり、フランスは早々に降伏して1940年にはパリはナチス・ドイツの占領下に入る。マヌエル・ピサロも1940年にはパリを脱出し、バルセロナやエジプトを経由してアルゼンチンに戻っているから、恐らくアリナもその頃ペルーに戻ったと考えられる。ペルー国立放送局（Radio Nacional del Peru）の69周年（随分と半端な数字だ）記念サイト[14]に放送局としての歴史的に重要なイベントの日付が列挙されており、その中の1944年6月の項に放送劇（Radio Teatro）の主要メンバーの中にアリナ・デ・シルバの名前が見える。そこではわざわざ「歌手（cancionista）」と断っているから、これは間違いなく我がアリナ・デ・シルバであろう。この当時はまだ歌手として活躍していたらしい。これ以後のアリナに関する情報は彼女の死まで無い。

アリナが世を去ったのは1972年4月13日であるが、そのことを報じている資料[10]にはアリナ・デ・シルバでもアリナ・アブリル・デ・ビベーロでもなく、単にソプラノ歌手のアリナ・レストナとだけ記し、作曲家のアルフォンソ・デ・シルバの妻であったと注記されている。彼女の晩年はデ・シルバ家とも縁が切れてしまったのであろうか。

アリナと前夫のパブロ・アブリル・デ・ビベーロとの間に生まれたフランシスコ・アブリル・デ・ビベーロは長じて画業を学び、ペルーの高名な画家になると共に、絵画のための解剖学の教授やペルー彫塑協会の理事長などの要職に就き、また多くの著書も著した[15]。上でフランシスコはアルフォンソ・デ・シルバの継子となったように記したが、ペルーのサイトでは彼の姓はすべて実父の姓であるアブリル・デ・ビベーロになっている。アルフォンソ・デ・シルバの死後、フランシスコだけは実父のアブリル・デ・ビベーロ家に復帰したのだろう。彼は家族や親類の肖像画を多く残しており、それらは[16]のサイトで閲覧することが出来るが、そこにこの左に示したようなアリナ・デ・シルバの奇妙な肖像画があった。描かれた年代は不祥だが1960年代ではないだろうか。タイトルは「アリナ・レストナ・デ・シルバ 作者の母」とあり、描かれているのは椅子に腰掛けて編物をしているらしい年配の女性であるが、顔や身体の詳細が全く描かれていない。これがフランシスコの画風であれば納得できるがそうではない。同じサイトにある「パブロ・アブリル・デ・ビベーロ 作者の父」と題された絵やその他の家族や親類の肖像画は非常に写実的である。



どうして母親の肖像画だけ顔を描いていないのだろうか。未完作品という可能性もあるが、それならば何かの断り書きがあるだろう。しかしそういう断り書きはない。アリナ本人の希望か、あるいはフランシスコの意思で顔を描かなかったか、そこには何か屈折した深いわけがありそうである。フランシスコ・アブリル・デ・ビベーロが存命中ならば本人に確かめる手も全く不可能というわけではなかったが、彼はすでに 2004 年に世を去っている [15]。(ところがこの原稿の執筆から数年後に同じサイトを閲覧したら左に示した画像ではなく右に示した写実的な肖像画に替わっていた。何時頃の画像か不明であるが、年齢は 60 歳頃と思われる。どういう経緯でそうなったのかはわからないが、作者の没後に入れ替えたのであろう。)いずれにしてもアリナの晩年は華やかだったパリの生活とは対照的にひっそりとしたものではなかったのだろうか。

タンゴに全く関係の無い話の羅列で「そんなことはどうでも良い」と言われそうだが、出自が全く不明であったアリナ・デ・シルバについて、インターネットで検索した細切れの情報をパッチワークのようにつなぎ合わせるとこうなるということでご勘弁願いたい。

アラン・ブーランジェはアリナがタンゴを歌い始めたのはマヌエル・ピサロの提案によると述べている [3] が、それが何時ごろ、どういう経緯に基づいてであるかは明らかでない。また [3] 以外にそのことに触れた資料は無い。またブーランジェは、彼女はピサロのオーケスタに参加する以前にアマチュアの歌手として母国のペルーのワルツやフォルクローレを歌っていたという情報について、これはレコード製作者がアーティストを売り出す際の行き過ぎた想像ではないかとも述べている [4]。しかしアリナも彼女の前夫のパブロもペルー文化の振興・広報には熱心であったそうだから [7][10]、全く根拠が無い話ではないだろう。

アリナ・デ・シルバの歌手活動に言及した文献資料は、CD 付属の資料 [3][4][5] を除いて、全く無い。また検索エンジンでスペイン語圏のみならず、英国、フランス、ドイツなどのサイトも検索してみたが、全く何処にも見当たらなかった。但し検索エンジンに依存したことで、それに引っ掛からないような古い文献資料については当然ながら探しようが無かったことを付け加えておく。アルゼンチンの資料でもピサロやヘナロのようなフランスで

活躍したアルゼンチン出身のタンゴ人に関しては多くの記述があるが、アリナについてはピサロ楽団のボカリスタとして名前が挙げられている以外は全く無視されている。彼女の活躍の舞台であったフランスにおける文献資料も見出せない。前述のようにペルーの資料も彼女のタンゴ歌手としての活動には全く触れていない。但し、彼女のフィルモグラフィはフランスのサイトで見つかった[18][19]。それらによれば彼女は“Je T’adore Mais Pourquoi”(1931)、“La crise est fine”(1934)、“Fort Dolorés”(1938)の3本の映画に出ているようだが、詳細は不明でスチル写真も掲載されていない。またこれらの映画の中で彼女が歌っているのかも不明である。

結局のところ、アリナ・デ・シルバの録音活動に関しては国内のコレクターの方々に全面的に依存せざるを得ない。本稿に続く2種類のディスコグラフィの第1（ディスコグラフィ(1)）は芝野史郎氏から資料提供を受けて編集部で作成したものであり、アリナ・デ・シルバがソリスタとして録音したものがリストアップされている。第2（ディスコグラフィ(2)）は(1)とは別に彼女がマヌエル・ピサロ楽団のボカリスタとして録音したものを編集部でリストアップしたものである。彼女は実際にはタンゴ以外の曲目も多く録音していると思われるが、それらに関してはデータが無いので省かれている。録音年はいずれも推定である。ディスコグラフィ(1)の最後の2曲ではレコード会社が Victor-J となっているが、これは勿論オリジナル盤の製作会社ではなく、日本で輸入・プレスした会社であると解すべきである。ディスコグラフィ(1)及び(2)はアリナ・デ・シルバの全録音を網羅しているとは断言できないが、これだけのデータは他に例が無く、アリナ・デ・シルバに関する唯一無二の労作であり、またそれ故に第一級の資料である。幸いなことにこの2種類のディスコグラフィに記載されている録音の多くが CD や LP に復刻されているので、SP 原盤を持たない我々でもアリナ・デ・シルバの歌を結構に楽しむことができる。以下、ディスコグラフィ(1)とディスコグラフィ(2)に沿って、アリナ・デ・シルバの歌の誌上鑑賞を試みてみよう。勿論、あくまで私見に過ぎない。

① “*Ida y vuelta*” (作曲者不詳)

録音年は1925年と推定されており、アコースティック録音の最後期のものであろう。アリナの声も随分と若々しい。アコースティック方式の録音のためと思われるが、彼女特有の歌い癖も未だ顕著でなく、精一杯に歌っている印象を与える。有名曲ではないが聴き応えのある録音である。

② “*Ilusion*” (M. Pizarro)

彼女はこの曲が気に入ったのか、マヌエル・ピサロ楽団の歌手として2種類 (K-5370B (Gramophone(F))=AE-1988B (Gramophone(S)) (CD-1246) 及び D-19069A (Columbia(F))

(CD-1131))とソリスタとして1種類 (K-7397 (Gramophone(F)) (CTA-1006))、計3種類の録音がある。彼女が同一曲を複数回録音しているのはこの曲だけである。我国でも彼女のこの歌を好まれる方が多いようである。3種類の録音とも彼女の歌い方は相互に差し替えが可能と言って良い位に殆ど同一であるが、完成度から言えばやはり最後期の K-7397 が最も完成度が高いと言えるかもしれない。しかしこの録音は伴奏楽団がマヌエル・ピサロでないので物足りなく、また歌の最後に男声との重唱が入るのが余計と言えなくも無い。私個人の好みでは D-19069A が歌と伴奏とのバランスが最も良いように思う。

③ “*Tus ojos* (資料[10]では“*Tus ojitos*”)” (Alfonso de Silva) (3706 (Pathe))

前にも述べたようにこの曲はアリナの2番目の夫のアルフォンソ・デ・シルバが彼女に

捧げたもので、歌を聴く限りではタンゴに聴こえる。やや晦渋な印象で、それ程名曲とは思えないが、曲の謂れとの関係でここに挙げた。しかしアリナは自分に捧げられたこの曲を心を込めて丁寧に歌っている。

④ “Se acuerdan muchachos” (E. Delfino) (3711 (Pathe))

これは”Haragan”とのカプリングである。”Haragan”の方は有名であるが、“Se acuerdan muchachos”については諸資料に記載が無く、私もこのアリナ・デ・シルバの歌以外に聴いたことが無い。やや暗い感じの曲想であるが、アリナの歌唱スタイルにマッチした隠れた名曲名唱ではないかと思う。ディスコグラフィには伴奏のピアノ奏者の名前は記載されていないが、恐らくアルフォンソ・デ・シルバであろう。他の曲も含めてアルフォンソ・デ・シルバのピアノ伴奏もクラシック畑の人らしく落付いた雰囲気があって中々良い。

⑤ “Mi viejo amor” (Oteo) (RS-1193 (Regal))

これとカプリングの“Ya no canta chingolo”も良いが、恐らくカンシオンと思われるこの無名曲が中々の名唱である。アリナのゆったりとした歌い振りが効果を上げており、彼女がクラシック音楽に深い素養のあったことを思わせる。

⑥ “Donde estas corazon” (A. Berto-M. Serrano) (X-3825 (Pathe); CTA-1006)

高橋忠雄氏はこれを生で聴かれたわけで、羨ましい限りである。成る程、この曲をこのように歌えば大喝采を博するであろうことは想像に難くない。高橋氏が大満足されている様が眼に浮かぶ。アリナの歌唱スタイルとも良くマッチしている。これとカプリングの”Mama, yo quiero un novio” (CTA-1006)も中々の好演である。

⑦ “Garufa” (J. A. Collazo-R. Fontaina-V. Soliño) (X-3867 (Pathe)) (CTA-1006)

CTA-1006 では”Garuja”となっている。原盤にはそう印刷されているのだろう。こういうタイプの曲はアリナでぴったりで、楽しく聴ける。

⑧ “Piedad” (C. Percuocco-L. de Biasse) (X-3868 (Pathe)) (CTA-1006)

1928年の第5回オデオン作詞作曲コンクールで1位入賞の曲を早速録音したもので、これに限らず、彼女はアルゼンチンの新曲を積極的に取り上げている。重厚な内容の曲であるが、アリナはこれを大変立派に歌っており、この曲の名唱の一つに数えられるだろう。

⑨ “Je vous attendais (私は貴方を待っていた)” (M. Aubert-H. Poussigue) (3387 (Salabert))

⑩ “Comme autrefois (昔のように)” (M. Subroy-Learsi) (K-7769 (Gramophone)) (JA-978)

いずれも恐らくフランス人が作ったものと思われる。歌詞もフランス語である。取り立てて言うに値しない曲であり、録音であるが、それを敢えて取り上げたのはアリナ特有の歌い癖の由来が憶測できるからである。周知のようにアリナの歌には単語を長く引き伸ばすような歌い方と、歌詞の切れ目を鋭く断ち切るような歌い方に特徴があるが、この2曲を聴いてみるとそれが余り気にならない。ということはフランス歌謡（シャンソンと言ってしまおうと特定のジャンルの歌を指すことになるかも知れないので、ここではフランス歌謡とした）ではそのような歌い方が一般的で、アリナはそれをタンゴにも持ち込んだだけであるとも考えられる。勿論、これはあくまで憶測であり仮説に過ぎ



ない。

⑪ “Pobre pato” (J. Ghirlanda) (D-19163 (Columbia(F))) (CD-1246, FA-5019)

決して有名曲ではないが中々の佳曲で、いかにも古き良き時代のパリを髣髴とさせる名唱と言って良く、私の愛聴盤でもある。

⑫ “Pato” (R. Collazo) (D-19136 (Columbia(F))) (CD-1246)

⑪とは反対にこれは名曲であり、多くの歌手が取り上げているが、アリナの歌もそれらに伍して勝るとも劣らない名唱と言ってよい。

⑬ “Confesion” (E. S. Discepolo) (K-7769 (Gramophone(F))) (CTA-1006, DC-30)

これも⑫と同様に名曲・名唱が多いが、アリナの歌はそれらの中でも代表的な名唱と言って良いだろう。第2次大戦前の日本ビクターからの“VICTOR DANCE RECORD CLUB”という（本当の意味での）アルバム中に収められていたので、その当時から多くの日本人にも親しまれたと思われる。

⑭ “Adios Argentina (Adios Argentina)”(G. H. Matos Rodriguez-Silva Valdez) (X-94104 (Pathe)) (CD-1229,CTA-1006)

⑮ “La cancion de Buenos Aires”(A. Maizani-O. Cufaro-M. Romero) (K-7466 (Gramophone)) (CTA-1006, JA-560)

⑯ “Mi Buenos Aires querido”(C. Gardel-A. Le Pera) (K-7609 (Gramophone)) (CTA-1006)

第2次大戦以前は大農場主のようなアルゼンチンの富裕な人々は年の半分の農閑期はパリで過ごしたそうであるから、アリナが歌うこれらの曲はそのような人々に郷愁を呼び起こすとともに、アルゼンチンを知らないフランスの人々にアルゼンチンへの関心を喚起することにもなったのであろう。

⑰ “Pero el dia que me quieras”(E. S. Discepolo) (K-7965 (Gramophone))(CTA-1006)

芝野史郎氏によれば、ディセポロは1935年に映画「アルマ・デ・バンドネオン」の主題曲として5曲作ったが、そのうちで今日も演奏されるのは“Alma de bandoneon”と“Cambalche”の2曲だけである。この曲は残りの3曲のうちの1つである（CTA-1006 ライナーノート）。アリナの歌以外にこの曲の演奏例を寡聞にして私は知らない。特に名曲とは言えないが軽妙な感じで楽しく聴けるので私は愛聴している。こうして挙げてゆくとキリが無くなるので、この辺りで止めておく。

⑰の曲といい、先の④、⑤、⑪といい、彼女はアルゼンチンでもそれ程知られていないような無名の佳曲を取り上げているが、これがすべて彼女自身の選曲によるとも思えない。誰かの助言に基づいていると考えた方が自然であるが、その誰かが誰であるかはわからない。あるいはマヌエル・ピサロあたりであろうか。

アリナ・デ・シルバの歌には独特の歌い癖があり、決してお手本になるような歌い方ではないが、そこに自然に漂ってくる雰囲気とも言うべき捨て難い魅力がある。それがパリで高い人気を博した要因ではなかったかと推測する。最近では、歌唱技術は優れているもの



の、何となく無機的で独特の雰囲気には乏しい女性歌手が多いようだ。それに比べればアリナの歌は決して教科書的ではないが、しかし彼女にしか表現できないものを持っているように私には感じられる。

ディスコグラフィ（１）と（２）に記載されたアリナ・デ・シルバの録音数は63曲を数える。前述のようにこのディスコグラフィはタンゴを中心としているので、実際にはここには取り上げられていない非タンゴ系の録音も少なからずあると思われる。アルゼンチンから見れば外国のフランスでタンゴを中心に約15年間で六十数曲以上の録音を残しているというのはやはり相当な実績と見るべきである。それでもペルー出身で、フランスのパリで、アルゼンチン・タンゴを歌った彼女はタンゴ史の上からは所詮傍流に過ぎなかった。とは言え六十数曲もの録音を残したのであるから傍流と言っても大傍流には違いなく、今日我々は彼女が遺してくれたレコードのお陰で束の間ではあるが古き良き時代のパリを仮想体験することができるのである。

本稿をまとめるに当り、貴重な資料をご提供いただいた関西大学社会学部教授永井良和氏と、ディスコグラフィその他のこれまた貴重な資料をご提供いただいた芝野史郎氏に深甚の謝意を表します。

- [1] 高橋 忠雄、ダンスと音楽—高橋忠雄滞欧通信特輯—、昭和12年9月号、pp.21-23
- [2] Juan Manuel Bonet, “Mapa del país surrealista”, http://www.abc.es/cultral/semanal/fijas/arte/estasesmana_001.asp
- [3] Alain Boulanger, “LE TANGO A PARIS 1907-1941”, FA012 (Frémeaux & Associés) (CD ライナー)
- [4] Alain Boulanger, “ARGENTINA IN PARIS MANUEL PIZZARO 1924-1950”, FA5019 (Frémeaux & Associés) (CD ライナー)
- [5] Pat Robson and Bruce Bastin, “BUENOS AIRES to MADRID”, HQ CD 88 (Harlequin) (CD ライナー)
- [6] 齋藤 富士郎、Tangolandia、2001 秋、pp.12-15
- [7] <http://www.editoraperu.com.pe/Identidades/93/apuntes.asp>
- [8] <http://www.kingkong.demon.co.uk/ngcoba/ab.htm>
- [9] http://www.artepoetica.net/Cesar_Moro.htm
- [10] “Criollos Peruano en el Mundo” http://criollosperuanosenelmundo.blogspot.com/2006_06_01_criollosperuanosenelmundo_archive.html
- [11] “Homenaje a Alfonso de Silva”, http://www.callao.org/cultura/homenaje_silva/mensaje_familia.htm
- [12] http://es.wikipedia.org/wiki/Alfonso_de_Silva
- [13] “Homenaje a Alfonso de Silva ADS”, http://www.callao.org/cultura/homenaje_silva2/index.htm
- [14] <http://www.radionacional.com.pe/aniversario.asp>
- [15] “Artistic Statement for Francisco Abril De Vivero”, http://www.absoluearts.com/poortfolios/a/abrildevivero/artist_statement.html

- [16] <http://abrildevivero.com/Galeria/>
- [17] http://www.abrilandia.com/ADS/Pages/liens_es.htm
- [18] <http://www.cinefil.com/cinema/fichepersonnalite.cfm?ref=2018>
- [19] <http://cinema.encyclopedie.films.bifi.fr/index.php?pk=51261>

写真説明

Alina de Silva(2) : 「ダンスと音楽」誌 昭和 12 年 9 月号表紙 出典[1]

Alina de Silva(1) : アリナ・レストナ・デ・シルバの肖像画 出典[16]

以上の 2 葉は本文中の該当箇所（赤いフォントで表示）に挿入してください。

Alina de Silva(3) 出典[4]

Alina de Silva(4) 出典[4]

Alina de Silva(5) 出典 CTA-1006

以上の 3 葉は適当に使ってください。